

## 『西廂記』と酒令―「西廂記酒令」を中心に―

樊 可 人

### はじめに

張生と崔鶯鶯の恋物語をもとに作られた雜劇の名作である『西廂記』は、古来多くの人々に親しまれ、文人や学者の注目を浴びてきた。

明清時代には、『西廂記』の版本が百種以上現れただけでなく、作品の流行の影響で、小曲や八股文などの戯曲以外のジャンルにも、『西廂記』の話と関わるものが現れた。酒席で行われる遊びである「酒令」は、その中の一つである。古来の酒令を広く収録した『中国酒令大観』には<sup>1)</sup>、『西廂記』の書名や登場人物名を題とする酒令が十三種収められ<sup>2)</sup>、『紅樓夢』(七種)や『水滸伝』(四種)を凌ぎ、最も多い。また、『元明戯曲葉子』や『紅樓』人鏡令」など、表面上は『西廂記』に言及していないように見える酒令にも、『西廂記』の内容が取り込まれている場合がある。かように『西廂記』は、しばしば酒令で用いられた戯曲小説の一つであると言える。

森槐南氏は上記のような酒令の特徴を捉え、「酒令文学」という見方を提唱した<sup>3)</sup>。また佐久間貞次郎氏や西村文

則氏らも、酒令に関する文章を残している<sup>4)</sup>。さらに劉初棠氏は、『中国古代酒令』において、酒令の変遷や、占いや歌舞などとの関係について考察を加えた<sup>5)</sup>。以上の研究は、いずれも酒令全般を考察対象としているため、『西廂記』と関わりのある酒令については簡単な紹介をするにとどまっている。しかし『西廂記』を利用して行われた酒令は、数が多いばかりでなく、『金瓶梅』や『品花宝鑑』などの小説の中でもそうした酒令が行なわれる場面が見られる(詳しくは後述する)他、「西廂記酒令」を収録した作品集である『巾箱小品』が嘉永三年(一八五〇)に日本に伝来し<sup>6)</sup>、のちに和刻もされたことから<sup>7)</sup>、『西廂記』と関わりのある酒令は中国だけでなく、日本における『西廂記』の受容問題を考える上でも大変重要な存在だと言える。

はじめて『西廂記』と関わりのある酒令を詳しく紹介したのは、恐らく周作人氏であろう。周氏は『書房一角』で『巾箱小品』を取り上げ、そこに収録される「唐詩酒籌」は雑駁であるのに対し、「西廂記酒令」は同一の作品から出ているため、整っていると指摘する。また、酒令

や灯謎(灯簞に張った謎を解く遊び)などは、学者にとつて無視することのできない資料だと述べる<sup>8)</sup>。

その後、『西廂記』と関わりのある酒令に注目したのは小川陽一氏である。小川氏は、『万用正宗』などの明代の日用類書では、『論語』や『百家姓』などの「童蒙教育の最も初歩的かつ基本的な教科書」と並んで、「成人に対してすら『淫詞』『誨淫書』として禁止され」、「文辞上の表現の難解さも『百家姓』や『蒙求』の比ではない」『西廂記』が最もよく酒令に用いられた点に興味を抱いた。

そして、『万用正宗』に収録される『西廂記』の酒令を解釈し、また『西廂記』の酒令が行われた『金瓶梅』中の場面を分析することによって、『西廂記』は「識字能力のある者だけでなく、文字を知らない人びとにも広く知られ愛されてきた」と推測した<sup>9)</sup>。

小川氏の研究によって、『西廂記』と関わりのある酒令が小説の展開や人物像などに及ぼした影響などの受容状況がかなり明らかとなった。しかし、『西廂記』酒令の変遷や、その特徴の有無については、未だはっきりしないところがある。また、『西廂記』や『水滸伝』などの戯曲小説に興味を抱く人々が少なからずいた江戸時代に、これらの酒令に興味を示す人間がいたかどうかとも考察に値する。本稿では、『巾箱小品』所収の「西廂記酒令」を中心に、上記の問題を論じる。

一 前述したように、『西廂記』と関わりのある酒令の数は、他の戯曲や『水滸伝』、『紅樓夢』のような小説と関わりのある酒令の数に劣らない程多い。

現在見られる『西廂記』と関わりのある酒令の記載の中で、最も早いのは恐らく明代のものであろう。その形式を簡単にまとめると、『西廂記』中の表現のみを用いて特定の意味を表す文を作るものと、曲牌名や人名などの指定された用語と組み合わせる特定の意味を表すものの二種類に分けられる。小川氏は、これらの酒令を行うには、『西廂記』の曲詞を記憶していなければいけない<sup>10)</sup>ため、「初歩的な文字教育を受けた程度の者にとつては、それほど容易に理解できるものではなかった」と言う<sup>11)</sup>。ただ、『金瓶梅』第二十一回には、孟玉楼の誕生日を祝うために開かれた酒宴で、文字の読めない呉月娘や孫雪娥らが、『西廂記』の曲詞を用いた酒令に見事に答える場面が描かれている。このことについて小川氏は、「それにもかかわらずこの場面の叙述が当時の読者に不自然に思われない性質のものだったとしたら、酒令においては、少なくとも西廂令類においては、必ずしも読書によって得られた知識を前提とするものではなくて、戯劇や歌曲などの耳からの知識で間に合っていたらしいことを推測させる」と述べる<sup>12)</sup>。確かに『金瓶梅』では、『西廂記』がしばしば演じられたり歌われたりするから<sup>13)</sup>、文字が

読めない人でも何度も聞けばその曲詞を暗記できるかもしれない。

一方、清代の書物に収録される『西廂記』と関わりのある酒令の多くは、籌令である。例えば、『巾箱小品』に収録される「西廂記酒令」は<sup>13)</sup>、俞敦培が編纂した『酒令叢鈔』(光緒四年(一八七八)刊)巻四「籌令」にも収められている<sup>14)</sup>。籌令について、俞敦培は凡例で次のように説明する。

酒籌所以記飲數。白香山詩「醉折花枝作酒籌」是也。

後人書令於籌、探得者照飲、不知始於何時。厥法良便、且免趨避。

酒籌は飲む數を記す所以なり。白香山の詩の「醉ひて花枝を折り酒籌を作す」は是れなり。後人令を籌に書き、探り得る者照して飲むは、何れの時より始まるかを知らず。厥の法良便にして、且つ趨避するを免る。

「西廂記酒令」の場合は、『西廂記』に見られる曲詞が書かれた籤を引くと、その酒令に従って遊び、酒を飲む形となる。『酒令叢鈔』には、「西廂記酒令」のほかに、「訪鶯鶯令」、「芸雲軒西廂新令」といった籌令も収録されている。周長森が俞敦培のために書いた序文で

た『西廂記』と関わりのある籌令だと言えよう。

## 二

「西廂記酒令」は複数の書物に収録されているとは言え、その内容は全く同じというわけではない。筆者はまず、清代に出された『巾箱小品』と『酒令叢鈔』所収の「西廂記酒令」を比較してみた。両書に収められる「西廂記酒令」の内容や出処をまとめた表を末尾に付したので参照されたい。なお、以下に引用する『巾箱小品』と『酒令叢鈔』所収の「西廂記酒令」の番号及び内容は、すべて附表による。

清末に最も流通した『西廂記』の版本は、恐らく金聖嘆の『第六才子書』だろう<sup>15)</sup>。「西廂記酒令」に用いられる『西廂記』の曲詞は、基本的にこの『第六才子書』系統の本から取ったものだと考えられる<sup>16)</sup>。『巾箱小品』本の64番「要算主人情重」や82番「情疎林圃与我挂住斜暉」などが顕著な例である。82番のように本文をそのまま引用するものもあれば、33番の「太平車敢有十余載」(原文は「端的太平車敢有十余載」)や88番の「口没遮欄」(原文は「小孩児口没遮欄」)のように、文を切り取って引用するものも存在する。33番の曲詞は、もともと張生(『西廂記』の男主人公)の憂いを表現した句であり、88番は、もともと崔鶯鶯(『西廂記』の女主人公)が紅娘(崔鶯鶯の召使い)と話した時の遠慮の無い様を形容した言

愈芝帖大令、挂冠侍養、僑寓双江。關地數弓、蒔花種竹。四方同好之來者、倒屣聯袂、觴詠無虛日。君以多材多芸、每登飲席、輒奉新令、如匡鼎說詩、語妙解頤。

愈芝帖大令、挂冠して侍養し、双江に僑寓す。地を關くこと數弓にして、花を蒔え竹を種う。四方の同好の來たれば、倒屣聯袂し、觴詠すること虚日無し。

君多材多芸を以て、飲席に登る毎に、輒ち新令を挙げ、匡鼎の詩を説き、語妙にして解頤せしむるが如し。

と述べていることから、『酒令叢鈔』に収録される諸酒令は、確かに当時の酒席で遊ばれていたことが分かる。『巾箱小品』『酒令叢鈔』所収の「西廂記酒令」には、いずれも作者や成立時期に関する情報は書かれていないが、『巾箱小品』の日本に伝来した時期から考えると、遅くとも咸豐年間(一八五一〜一八六一)には既に中国で行われていたと考えられる。そのほか、民国六年(一九一七)に出た雷瑠の『娛萱室小品』巻五には<sup>17)</sup>、「西廂酒令」という作品が収録されており、内容から見ると、『巾箱小品』と『酒令叢鈔』所収の「西廂記酒令」と同じ系統に属するものだと考えられる(後に詳述する)。このように「西廂(記)酒令」は複数の書物に収録されていることから、清末から民国初期にかけて酒席でよく行われ

葉である。だが、両方に付された令は、それぞれ「体胖者飲」(体の太った者が飲む)、「無鬚者飲」(髭のない者が飲む)となっており、もとの曲詞とは全く違う意味を表している。また、酒令の内容にも、両書には多少異同がある。例えば、『巾箱小品』本の81番「遊糸牽惹桃花片」に付された酒令は、「微鬚者飲」(少し髭が生えている者が酒を飲む)となっているのに対し、『酒令叢鈔』本の同箇所が付された酒令は、「鬚長者飲」(髭が長い者が酒を飲む)となっている。ただ、いずれも『西廂記』曲詞の表面上の意味とはうまく繋がっている。周作人氏の「頗る文字遊びの面白味がある」(很有文字遊戲的意味)のことは、「西廂記酒令」のこのような点を捉えて発されたものであろう。

数から見ると、『巾箱小品』所収の「西廂記酒令」は一百七十七条あるのに対し、『酒令叢鈔』所収のものは一百条しかなく、しかも後者は全て前者に収められている<sup>18)</sup>。作品名が同じであること、内容上重なりがかなりあることから、両書の「西廂記酒令」は同じ系統に属すると考えられる。しかし、両書はいずれも作者や成立時期に関する情報は書かれていない。したがって、『酒令叢鈔』の出版時期は『巾箱小品』より後であるものの、必ずしも『巾箱小品』所収の「西廂記酒令」が『酒令叢鈔』所収のものより先に出了とは限らない。

『巾箱小品』本と『酒令叢鈔』本の両方の酒令に引用される曲詞の出処を比較すると、それぞれの特徴の共通

点と相異点が浮かび上がる。附表の『第六才子書』出処を見れば分かるように、いずれの「西廂記酒令」の曲詞も、原作に見える順番では必ずしも並んでいない（そもそも「籌令」の特徴から考えると、順番通りに並ぶ必然性はない）。ただ、両方の「西廂記酒令」いずれにおいても、『第六才子書』の編者である金聖嘆が原作者の手になると考える十六章全てを引用するのに対し、他人が書き足したと考える後の四章については、最後の一章（五之四）の「清江引」曲に見られる「願天下有情的都成了眷属」（世の愛し合う者たちはみな夫婦になりますように）だけを引用する点が注目される。この一句を金聖嘆は、「実乃妙妙」（実に乃ち妙妙たり）と評する（前十六章に対してはこのような評価が多く下されているが、最後の四章に対しては極めて少ない）。『第六才子書』では続作とされているものの、『西廂記』物語の結びであり、金聖嘆からも高く評価されているからこそ、右の一句は両書に収録されたのではないかと思われる。このことから、金聖嘆の『西廂記』に対する理解は、当時の『西廂記』酒令にも影響を及ぼしたと考えられる。

また『西廂記』の引用に関し、『酒令叢鈔』本「西廂記酒令」はすべて曲から出ているのに対し、『巾箱小品』本では四箇所白（人物のセリフ）が取り込まれている（23番、27番、71番、89番）。このことから、『酒令叢鈔』本の編者は曲にのみ関心を示したのに対し、『巾箱小品』本の編者は曲は勿論、白にも目を向けていたことが分かる。

清の陳森が北京滞在中の見聞をもとに書いた『品花宝鑑』の第十五回には、次のような興味深い場面が描かれている<sup>20</sup>。

その場でこの四人は少し酒を飲み、花見をした。蕭次賢は袁宝珠に、「あなたたちは度香（徐子雲の号）が刻んだあの十六の酒令を見ましたか。」と尋ねた。宝珠は、「もちろん見ましたとも。」と言った。子雲は、「あなたたちは今日どうしてそれらに従って酒令を行わないのですか。あなたたちの才知を見られませぬのに。」と言った。宝珠がまだ答えないうちに、金漱芳が言った、「それらの酒令は私たちには恐らく行えないと思います。一つには頭の働きの良さが欠けているからで、二つには唐詩と『詩経』を熟知していないからです。どうしてあのように内容をうまく繋げて話すことができませんか。家でいくつかの本を取り出し、要求に合うものを一個一個探して当て嵌めていかなければ、作り上げることができません。」（中略）

子雲は、「今日試しにやってごらんさい。きつとうまくできますよ。」と言った。そしてサイコロを取って来るよう言いつけると、召使いはそれを盆の上に置いて席まで届けた。子雲は宝珠に先に投げるよう言ったが、宝珠は依然として断り、やろうとしなかった。それでも子雲、次賢が無理に勧めるので、「ど

前述したように、『巾箱小品』と『酒令叢鈔』のほか、雷瑠の『娛萱室小品』にも、無名氏の「西廂酒令」が一百八条収められる。そしていずれもが、前の両書所収の「西廂記酒令」と同一の系統に属すると考えられ、内容も基本的に『巾箱小品』本と一致する<sup>21</sup>。順番も、『巾箱小品』本の56番「好事児收拾得早」が「西廂酒令」では末尾の第一百八条に移されている以外は、全て一致する（ただし、「西廂酒令」にはない『巾箱小品』本の6、12、96、97番を除く）。

以上の三書に収録される「西廂（記）酒令」は同じ系統のものでありながら、文字、特に酒令の部分に異同が多少あることから、人々が『西廂記』に対して様々な解釈を行い、楽しもうとした気持ちが見える。

### 三

ここまで見た通り、明代の書物に収録される『西廂記』と関わりのある酒令は、専ら本作品中の表現を用いるか、ほかの用語と連用して特定の意味を表したものである。一方で清代の酒令には、これとは異なる籌令が多く見られるようになる。明代の書物に多く見られる文字遊びの類いの『西廂記』酒令をきちんと行うには、『西廂記』中の曲詞の意味をある程度理解し、暗記もしなければならぬ。また、ほかの専門用語などと連用する場合には、より高い文学的素養と、機転の良さが要求される。

うしてわざわざ私たちに滑稽なことをやらせるのですか。私はほかのものをぱっきり覚えていないだけでなく、これらの曲牌の名前すらわずかし記憶しておりません。瘦香（漱芳の字）ならまだできるかもしれませんが、私は間違いないくらいきけません。」と言ひ、やむを得ず投げはじめた。何回も投げた後、一つの組み合わせができた。その名は「緑暗紅稀」である。宝珠はじつと考え始め、しばらく経ったが、答えが得られなかったため、「これは藪蛇ではありませぬか。」と言った。（中略）

また「打破錦屏風」を投げあてると、宝珠は、「この題目はちょうどいいんですが、極めて難しいところもあります。『打破』の二文字から考えなければなりません。でも、もしできたら、意外といい令になります。」と言った。漱芳は、「これは難しいです。私にはできません。恐らくその『詩経』の句だけでは容易にできませんでしょう。」と言った。宝珠はぼんやりと考えていたが、唐詩を思い出しても、『西廂記』に当て嵌まらず、『西廂記』を思い出しても、『詩経』に当て嵌まらないため、非常に苛立った。そしてずいぶん考えてから、『詩経』には『何を以てか我が墉を穿たん（何以穿我墉）』という句がありませんでしたか。」と尋ねた。次賢は、「実に素晴らしい。この一句はもうぴったりですので、間の句がうまく繋がれば大丈夫です。」と言った。宝珠の顔に喜びの色が浮かび、

にこにこしながら詠んだ、「錦屏風を破ると、窓の格子いっぱい暮色が広がっており、すだれがさらさらと鳴っている。月は高く、どうして私の垣に穴を開けられよう。（打破錦屏風、暮色満房櫺、吉丁当敲響簾櫺。月兒高、何以穿我墻。）」子雲らは大いに称えた。（中略）

宝珠はようやく顔の表情を和らげて喜んだ。漱芳の心はまた焦ってきた。もう一度行えば、宝珠に及ばないだろうと思い、「もういいでしょう。これはとても気を遣うため、私はもう投げません。」と言った。

蕭次賢は男優の袁宝珠、金漱芳の二人とともに、徐子雲の「怡園」に桃の花を観に来てそこで酒を飲んだ。その際、徐子雲は寵愛する袁宝珠と金漱芳に酒令を行わせた。作者の陳森はその規則についてはっきり書いていないが、傍線部の宝珠の答えから、大体の構成が窺える。

まず一句目の「錦屏風」は骨牌の組み合わせであり、酒令を行う者が投げたサイコロの点数によって決まったものだと考えられる<sup>[21]</sup>。二句目の「暮色満房櫺」は、唐の太宗李世民的「秋日即目」に見える句である。三句目の「吉丁当敲響簾櫺」は、『第六才子書』二之四の「天淨沙」曲に見られる曲詞であり、四句目の「月兒高」は曲牌の名である。そして五句目は、『詩経』召南・行露に見える言葉である。以上のように、彼らが行った酒令は「骨

氏が『日用類書による明清小説の研究』で論じている<sup>[22]</sup>。氏は結論で、「とりわけ版本数が多いことは何を意味するのか。弾圧の厳しさが次つぎと新しい版を生み出したとも見られようし、逆に弾圧が果して本気で行われたのかを疑うことができるかもしれない。だがいずれにしても、背後に大きな需要が存在していたことだけは確かであろう。」と述べる。確かに、弾圧がどこまで厳しく行われたかは不明なところがあるが、全く無かったとは考え難い。程度がどうであれ、弾圧が行われたからこそ、『西廂記』は人々に親しまれ、「西廂記酒令」などの遊びも、『西廂記』を楽しむもう一つの方法として生み出されたのかもしれない。

#### 四

中国の酒好きは、自国で酒令を楽しむだけでなく、通商貿易によってそれらを日本にもたらした。江戸時代には、外国との貿易が盛んに行われた長崎に多くの清客がいた。唐人屋敷から自由に出ることのできない窮屈な生活を送る彼らについて、山本紀綱氏は次のように記す<sup>[23]</sup>。

唐人屋敷の単調な毎日の生活を慰める唯一の楽しみはどうしても飲食にあったので、唐人部屋のどこかで必ず毎日のように酒宴が開かれていた。

牌名十唐詩十『西廂記』十曲牌名十『詩経』という構成となっており、明代の書物に見られる『西廂記』酒令の形式に非常に似ている。

一句目の骨牌名がサイコロの点数によって偶然決まった他は、二句目から五句目まで、内容上特に矛盾が無い限り、回答者は決まった範囲から自由にことばを選ぶことができた。だが、宝珠と漱芳の発言を見ると、彼らはいくつ酒令に前向きではなかったようである。宝珠がかなり頭を絞ってようやく皆に称えられる答えを作り出したことを考えると、実際の社会でもこうした文字遊びの類いの酒令を苦手とする人がいたと考えられる。

一方、「西廂記酒令」などの籌令では、回答者は特に才智を働かせる必要がないため、『西廂記』にそこまで詳しくなく、また文学的素養がそれ程無くとも、気軽に楽しむことができたと考えられる。『品花宝鑑』第二十回にも、徐子雲、蕭次賢、袁宝珠、金漱芳ら九人が酒令を行う場面が見られる。その際使用された『水滸伝』と関わりのある籌令について、次賢が「這籌倒也好、喝得爽快。」（この籌は悪くなく、気持ちよく飲める。）と述べたのは、先に挙げた第十五回の酒令を思い出したからではないだろうか。俞敦培もまた、「厥の法良便にして、且つ趣避するを免る。」と言っている。

明清時代には、『西廂記』と『水滸伝』が特に多くの人々に愛されたが、一方でそれらの作品を非難する人々も少なからず存在した。このことについては、小川陽一

その宴会の様子について、『長崎名勝図絵』巻之二下「南辺之部」に、

また宴席の間拳令をなす、これ亭主たる者客人を饗応し酒を勧めんがために拳をはじめて酒を強ゆ、令して或は三拳三盃、三拳二盃、三拳一盃と定めをなし、酒を盃に盛り、其上にて互に拳しを出し双方より声を発し彼我の指の出る数をいひ、其数当りたる方を勝とし、負たる方には酒を呑しむ。

とある<sup>[24]</sup>。また、文化元年（一八〇四）から二年（一八〇五）までの頃に役人として長崎に滞在した大田南畝の「戲贈英波生。生善拇戦。」（戯れに英波生に贈る。生拇戦を善くす。）に次のようにある<sup>[25]</sup>。

崎陽多酒令	崎陽酒令多く
拇戦最称雄	拇戦最も雄と称せらる
金谷傾千石	金谷千石を傾け
航船掉一空	航船一空を掉ふ
伸時先屈螻	伸ばす時先づ屈螻し
揮処自成風	揮ふ処自ら風を成す
相对真無敵	相对すれば真に敵無く
横行四座中	横行四座中に横行す

二句目の「拇戦」は、酒席で行われたいわゆる拳令の類である。当時の長崎でこれがもつとも盛んに行われたのは、そこに居住していた清人の影響を受けたものと思われる<sup>26)</sup>。一方で、一句目にもあるように、酒令もまた甚だ盛んに行われていた。その中に『西廂記』と関わりのある籌令が含まれていたことは、南畝が蘭学者で幕府の医官でもある桂川国瑞（号は月池）に送った「医院月池（桂川国瑞）酒令籤有張生、鶯々而無夫人、紅娘。以予所藏二籤換狀元、会元。戲賦為寄。」（医院月池（桂川国瑞）の酒令籤 張生、鶯々有りて夫人、紅娘無し。予の藏する所の二籤を以て、狀元、会元に換ふ。戯れに賦して為に寄す。）の詩から窺える<sup>27)</sup>。

花外鶯々不出門 花外の鶯々 門を出でず  
張生才調惱芳魂 張生の才調 芳魂を悩ます  
紅娘一伴夫人去 紅娘一たび夫人を伴ひ去り  
奪著狀元与会元 狀元と会元とを奪著す

酒令の具体的な内容は分からないが、「籤」という字を使っていることから、南畝と国瑞の所藏品は籌令の類いだと考えられる。また、詩題に見られる「張生」「鶯々」「夫人」「紅娘」は、『西廂記』の登場人物である。桂川国瑞がどこでその「籤」を手に入れたかは不明だが、長崎に

やってきた清客がもたらした物であることは間違いないだろう。前述した唐人屋敷の退屈な生活を考えると、『西廂記』と関わりのある籌令は、少なくともそこで開かれた酒宴では遊ばれていたはずである。

江戸後期には、多くの『西廂記』が日本に伝来し、唐通事の教材として使われただけでなく、『西廂記』と関わりのある小曲も、長崎を経由して日本全国に伝わっていた<sup>28)</sup>。そうした背景もあり、当時の日本の知識人には、『西廂記』を愛読したり、その内容を典故として用いて詩を作ったり、本作品と関わりのある小曲を勉強したりした者が少なからず存在した。大田南畝は当然その一人であるが、桂川国瑞も、『西廂記』と関わりのある籌令を所有していたことから、『西廂記』に興味を抱いていた一人とみなせる<sup>29)</sup>。また大窪詩仏も、「賦得『酒無独飲理』」（「酒は独り飲む理無し」を賦し得たり）で次のように詠じている<sup>30)</sup>。

酒名掃愁籌 酒は掃愁籌と名づけられ  
又号釣詩鉤 又た釣詩鉤と号せられ  
愁裏君試飲 愁裏君 試みに飲め  
独酌豈慰愁 独酌 豈に愁ひを慰めんや  
吟時如独飲 吟時 如し独り飲まば  
好句不可求 好句 求むべからず  
諺云酒飲酒 諺に云ふ酒 酒を飲むと

記』と関わりのある酒籌が日本の知識人に所有されていたことから、長崎の唐人屋敷に居住する清客だけでなく、本作品に興味を抱いていた日本の知識人の間でも、こうした籌令は遊ばれていたと思われる。

### おわりに

中国の酒宴には、流觴曲水のような風雅な遊びもあれば、文人でなくとも楽しめる俗なものもあった。『西廂記』と関わりのある酒令にも、四書五経のような古典を巧みに利用して自身の文才を示す高度なものと、ただ酒籌を引いて、そこに書いてある簡単な指示に従うだけのものがある。清代の書物に収録される「西廂記酒令」をはじめとする「籌令」は、文学の素養がそれ程ない人や、引用する作品の内容にそこまで詳しくない者にとっても易しい酒令であったと考えられる。また、『西廂記』の出版が禁じられていたとされる明清時代には、こうした酒令を行う酒席が、作品を味わう一つの場となっていたのではないかと思われる。

詩仏は、名士たちと詩を唱和しあう酒宴を開きたいと言いつつ、またその宴席では酒令を行うことがなく、酒籌を使うこともないようにと願っている。こうした彼の思いは、どの酒宴でも酒令を行うのが一般的であった当時の状況を反映していると言えるであろう。

「西廂記酒令」が日本に伝来する以前に、既に『西廂

それと関わりのある酒令も行われていたことが窺える。また江戸後期には、『西廂記』に興味を抱いていた知識人の中に、小曲等の『西廂記』と関わりのある周辺作品のほか、酒籌のような道具も収集し、それを中国式のやり方で楽しむ者もいたと考えられる。

## 注

- [1] 麻国鈞・麻淑雲『中国酒令大観』（北京出版社、一九九三年）。  
[2] その十三種の酒令は以下の通りである。「鵠名、菓名『西廂』曲令」、「『西廂』曲貫衙門令」、「月令貫『西廂』令」、「四書貫『西廂』令」、「千家詩貫『西廂』曲令」、「訪鶯鶯令」、「『西廂記』酒籌令」、「会真令」、「『西廂』酒令百注」、「新選『西廂記』詞酒令」、「芸雲軒『西廂』新令」、「集『西廂』酒籌令」、「拜月西廂令」。
- [3] 森槐南『酒令文学』（『漢学』第二編第一号、育英舎、一九一一年）に「支那の料理が世界中最も贅沢で最も進歩して居る如く、酒の飲み方も亦最も発達して居る。この酒令なる者も五六人会飲の時の座興であつて以て酒味を酒味と添へる為のものであるが、座興といふものは日本にもある、けれども今の支那人の間に行はれて居る座興は慥かに日本の座興より進歩して居ると思ふ。之を今様に申すと酒令文学と称することが出来る。平民文学、田園文学など云つて居る如く酒令文学と云ふたからとて別に不適當とも思はれないのである」とある。

- 上の雕虫小技、非丈夫所当為、唯漢字性質上有此游戲之可能、学者亦不可忽視、則此類酒令与灯謎・詩鐘・对聯等同是很好的資料也。」とある。
- [9] 『日用類書による明清小説の研究』（研文出版、一九九五年）第二章「酒令に見る明清小説 第一節「酒令に見る西廂記」。
- [10] 前掲注[9]書第二章「酒令に見る明清小説」第一節「酒令に見る西廂記」。
- [11] 前掲注[9]書第二章「酒令に見る明清小説」第一節「酒令に見る西廂記」。
- [12] 『金瓶梅詞話』第四十二回や第六十八回などに見られる。なお、『金瓶梅詞話』第七十四回には、『北西廂記』のほか、『南西廂記』の演唱も見られる。蔡敦勇『『金瓶梅』劇曲品探』（江蘇文芸出版社、一九八九年）や伏滌修『『金瓶梅詞話』対『西廂記』的援引与接受』（『古籍整理研究学刊』二〇〇八年第六期、東北師範大学古籍整理研究所、二〇〇八年）に詳しい。

- [13] 『巾箱小品』には少なくとも二つの版本（華韻軒蔵版）系統（上海図書館所蔵本）と版元の不明なもの（九州大学附属図書館益田文庫所蔵本）があり、収録される作品の巻数や文字に異同がある。詳しくは拙稿『『西廂記』と八股文について——『唐六如先生才子文』を中心に——』（『中国中世文学研究』第七十号、二〇一七年）を参照。なお、本稿では九州大学附属図書館益田文庫所蔵本を使用する。

- [14] 芸雲軒、一八七八年。  
[15] 掃葉山房、一九一七年。

- [4] 佐久間貞次郎『支那風俗春秋』（立命館出版部、一九三二年）「灯謎酒令」、西村文則『酒譜』（啓松堂、一九三二年）「支那人の酒間遊戲と酒令」。
- [5] 上海人民出版社、一九九三年。
- [6] 『長崎船載唐本書籍元帳』巻九（国立国会図書館蔵）に『巾箱小品』一部一包が嘉永三年（一八五〇）に伝来した記録が見られる。

- [7] 西川寧・長沢規矩也編『和刻本書画集成』第十輯（汲古書院、一九七七年）に収録。
- [8] 『書房一角』（新民印書館、一九四四年初版、一九四五年再版）「西廂記酒令」に（筆者注）『巾箱小品』四冊 此書所收共十三種、第一冊為冬心先生画記五種（中略）此外則『冬心斎研銘』与『板橋題画』也是可喜的小品文章、至今翻看還覺得很有趣味。但是我現在想要說的、却是別一種東西、即『西廂記酒令』是也。本来『唐詩酒籌』亦自不惡（中略）唯『唐詩』範圍太広、稍嫌凌雜、不及『西廂』之同出一書、較為勻称。此令凡百二十条、不著撰人名字、俞敦培編『酒令叢鈔』、收入卷四『籌令』中、後又有自著『芸雲軒西廂新令』計一百条。集『閑情小録初集』中有『西廂酒籌』一卷、一百六条、汪兆麒撰、若最多者則為東山居士之『西廂酒令』計三百条、嘉慶丙子年刊、遠在俞・汪之前、但似不多見、故『叢鈔』中未説及。酒令本是一種勸酒的方便、最簡單的如猜拳・拍七之類、迨至用成語作籌、便与灯謎相近、很有文字游戲的意味了。『叢鈔』中有『四書貫西廂令』其云、『行乎富貴、金蓮蹴損牡丹芽』、這原是一個謎語、不過現在底面顛倒罷了。文字

- [16] 俞樾『茶香室三鈔』（『茶香室叢鈔』第三冊、中華書局、一九九五年）卷二十三「李日華西廂」に「明代所行『西廂記』皆李日華本、自金聖歎外書行而李本廢矣」（明代に行はるる所の『西廂記』は皆李日華本なるも、金聖歎の外書行はるるに自りて李本廢れたり。）とあり、呉梅『著摩他室曲話』（『呉梅全集』理論卷下、河北教育出版社、二〇〇二年）に『西廂』之工、人所共喻。即無聖嘆、何嘗不伝。吾謂自有聖嘆、而『西廂』乃真不伝也。何也。蓋時俗所通行者、非実甫之『西廂』、聖嘆之『西廂』也。而読『西廂』者、則以聖嘆之『西廂』、即為実甫之『西廂』也。」（『西廂』の工なるは、人の共に喻る所なり。即ひ聖嘆無きも、何ぞ嘗て伝はらざらん。吾謂へらく聖嘆有るに自りて、『西廂』乃ち真に伝はらざるなりと。何ぞや。蓋し時俗に通行する所の者は、実甫の『西廂』に非ず、聖嘆の『西廂』なればなり。而して『西廂』を読む者、則ち聖嘆の『西廂』を以て、即ち実甫の『西廂』と為すなり。）とある。

- [17] ただし、出処の不明な条が一つ存在する（附表『巾箱小品』本「西廂記酒令」108番「野草間花满地愁」）。
- [18] 『巾箱小品』本と『酒令叢鈔』本所収の酒令の並び順は、一箇所を除き基本的に一致する（『酒令叢鈔』本の100番は『巾箱小品』本では56番になる）。
- [19] ただし、稀に文字の異同がある。例えば、『巾箱小品』本「西廂記酒令」の1番「如今又也」と12番「送了人呵斷難又活」は、『西廂酒令』では、それぞれ「今又也」と「斷送了呵還使甚嘍囉」に作っている。また、『巾箱小品』本「西廂記酒

令」の5番「将没作有」に付される酒令は「門前無酒者飲」となっているのに対し、『娛萱室小品』本の同箇所に付される酒令は「無酒者飲」となっている。

〔20〕本稿では、東京大学東洋文化研究所所蔵『品花宝鑑』本（幻中了幻齋、一九〇九年）を使用。原文は以下の通り（字体は原則として常用字体を用いる）。

当下這四人喝了一會酒、看了一會花、（蕭）次賢對（袁）宝珠道、「度香所刻那十六箇酒令、爾們看見沒有。」宝珠道、「怎麼沒有看見。」（徐）子雲道、「爾們今日何不也照這令行幾箇出來、也見見爾們的心思。」宝珠尚未回答、（金）漱芳道、「這箇我們只怕行不来、一來心思欠靈、二來這唐詩与『詩經』也不甚熟、那裏能說得這樣湊拍。除非在家裏把幾種書翻出來、揀對路的一箇箇湊、才湊得成呢。」（中略）

子雲道、「爾們今日試行一行、包管爾們行得好。」便叫拿付骰子來、家人便去取了付骰子放在盆裏、送到席上。子雲便叫宝珠先擲、宝珠尚推諉不肯、經子雲、次賢逼住了、只得說道、「何苦要我們做笑話。我非但別樣記不清、連這曲牌名也記得有限。或者瘦香還能、我是定說得不好的。」只得擲起來、擲了好幾擲、擲著了一箇色樣、名為「綠暗紅稀」、便呆呆的想来、想了一会、不得主意、便道、「這不是尋煩惱麼。」（中略）

便又擲了一箇「打破錦屏風」、便道、「這箇題目恰好、然難也難極了、須要在『打破』兩字上頭著想、若得湊成了、倒是箇好令。」漱芳道、「這箇難、教我就湊不成、

只怕那句『詩經』就不容易。」宝珠怔怔的想、想著了唐詩、又湊不上『西廂』、想到了『西廂』、又湊不上『詩經』、好不著急。想了好一会、問道、「『詩經』上不是有一句『何以穿我墉』麼。」次賢道、「妙極了、這一句已經穩妥、中間湊得連絡就好了。」宝珠面有喜色、欣欣的念道、「打破錦屏風、暮色滿房櫳、吉丁当敲響簾櫳。月兒高、何以穿我墉。」子雲等大贊。（中略）

宝珠始為解顏歡喜。漱芳心裏又著急起来。恐怕再行、不能及他、便道、「算了罷。实在費心得狠、我不擲了。」

〔21〕「綠暗紅稀」は、『妙錦万宝全書』卷之八（『中国日用類書集成』第十二卷、汲古書院、二〇〇三年）「八譜門」牙牌戲集の牌譜に収められている。また同項目には「錦屏風」の組み合わせも見られる。

〔22〕前掲注〔9〕書第二章「酒令に見る明清小説」第一節「酒令に見る西廂記」。

〔23〕『長崎唐人屋敷』（謙光社、一九八三年）第五章「唐人屋敷における唐人の生活」。

〔24〕長崎史談会、一九三一年。

〔25〕『南畝集』十五（『大田南畝全集』第四卷、岩波書店、一九八七年）。

〔26〕長崎で行われた中国の拳遊びについては、酒井欣『日本遊戯史』（弘文堂、一九四二年）六「遊戯完成時代」や増川宏一『日本遊戯史―古代から現代までの遊びと社会』（平凡社、二〇一二年）第三章「華麗な遊びの世界」に紹介されており、高橋浩徳「日本の拳遊戯（上）」（『大阪商業大学アミューズ

メント産業研究所紀要』第十五号、大阪商業大学アミューズメント産業研究所、二〇一三年）第四章「同時当て物拳―幕末までの主流の拳―」に詳しく考察されている。

〔27〕『南畝集』十六（『大田南畝全集』第五卷、岩波書店、一九八七年）。

〔28〕拙稿「江戸における『西廂記』の伝来とその受容について」（『中国学研究論集』第三十四号、広島中国文学会、二〇一六年）、「明清楽から見る江戸時代の『西廂記』故事の受容について」（『中国中世文学研究』第六十九号、中国中世文学会、二〇一七年）を参照。

〔29〕『杏園間筆』卷二（『大田南畝全集』第十卷、岩波書店、一九八六年）には、大田南畝が『西廂記』の物語に関係のある「文鮮花」という曲を友人のところで写したという記述が見られる。また、『南畝集』四（『大田南畝全集』第三卷、岩波書店、一九八六年）「七娘詞」には、『西廂記』に関わる典故が用いられている。

〔30〕『詩聖堂詩集三編』中冊（『詩集日本漢詩』第八卷、汲古書院、一九八八年）卷之四。

附表

番号	『巾箱小品』本	番号	『酒令叢鈔』本	『第六才子書』出處
1	如今又也 〔方飲者復飲〕	1	如今又也 〔方飲者復飲〕	四之四「錦上花」 如今又也
2	疑是銀河落九天 〔撒酒者飲〕	2	疑是銀河落九天 〔撒酒者飲〕	一之一「天下樂」 疑是銀河落九天
3	翠袖殷勤捧玉鍾 〔手拿杯者飲〕	3	翠袖殷勤捧玉鍾 〔手拿杯者飲〕	二之四「紫花兒序」 却教我翠袖慙勤捧玉鍾
4	光油油耀花人眼 〔新剃頭者飲〕	4	光油油耀花人眼睛 〔新梳頭者飲〕	二之二「滿庭芳」 光油油耀花人眼睛
5	將没作有 〔門前無酒者飲〕	5	將没作有 〔空杯飲〕	四之二「鬥鶡鶩」 將没作有
6	軟玉溫香抱滿懷 〔新娶者飲〕	6	軟玉溫香抱滿懷 〔新娶者飲〕	四之一「勝葫蘆」 軟玉溫香抱滿懷
7	北雁南飛 〔對門飲〕			四之三「端正好」 北雁南飛
8	紅袖鸞綰玉筍長 〔指甲長者飲〕			一之二「三煞」 紅袖鸞綰玉筍長
9	粉牆兒高似青天 〔身矮者飲〕			一之一「柳葉兒」 粉牆兒高似青天
10	著甚支吾此夜長 〔未婚者飲〕			一之二「二煞」 著甚支吾此夜長
11	滋洛陽千種花 〔好花木者飲〕			一之一「天下樂」 滋洛陽千種花

12	打扮得嬌嬌滴滴的媚 〔穿色衣者飲〕	11	打扮得嬌嬌滴滴的媚 〔穿色衣者飲〕	四之三「叨叨令」 打扮得嬌嬌滴滴的媚
13	玉簪兒抓住茶蘼架 〔身長者飲〕	12	玉簪兒抓住茶蘼架 〔身長者飲〕	三之三「駐馬聽」 玉簪兒抓住茶蘼架
14	我從來心硬 〔離家久者飲〕	13	我從來心硬 〔離家久者飲〕	二之二「後」 我從來心硬
15	悄悄相問爾便低低忪 〔交頭接耳者飲〕	14	我悄悄相問爾便低低忪 〔私語者飲〕	一之三「東原樂」 我試悄悄相問爾便低低忪
16	鳳簫象板錦瑟鸞笙 〔善樂器者飲〕	15	鳳簫象版錦瑟鸞笙 〔善樂器者飲〕	二之二「耍孩兒」 一對對鳳簫象板雁瑟鸞笙
17	銀樣鐵鎗頭 〔輸拳者飲〕	16	銀樣蠟鎗頭 〔輸拳者飲〕	四之二「後」 吓一個銀樣鐵鎗頭
18	風魔了張解元 〔孝廉者飲〕	17	風魔了張解元 〔孝廉飲〕	一之一「後庭花」 風魔了張解元
19	怎当他兜的上心來 〔作嘔吐者飲〕	18	怎当他兜的上心來 〔發煙癮者飲〕	四之一「油葫蘆」 怎当他兜的上心來
20	二月春雷響殿角 〔打雷一次〕	19	二月春雷響殿角 〔打雷一次〕	一之四「駐馬聽」 二月春雷響殿角
21	眼皮兒上供養 〔帶眼鏡者飲〕	20	眼皮兒上供養 〔戴眼鏡者飲〕	一之二「哨遍」 眼皮兒上供養
22	疾忙快分說 〔急口令〕	21	疾忙快分說 〔急口令〕	四之四「慶宣和」 是人呵疾忙快分說
23	小生感謝爾不尽也 〔孫姓飲〕			二之一「張生別法本云」 小生感謝爾不尽也



47	紙光明玉版字 〔善書者飲〕	42	紙光明玉版 〔善書者飲〕	紙光明玉版、字香漬麝蘭。
46	我一地胡挐 〔任意送一大杯〕			我一地胡挐
45	只將花笑拈 〔飛花飲酒〕	41	只將花笑拈 〔飛花送酒〕	只將花笑拈
44	語句又輕音律又清 〔合席各唱不能者飲〕	40	語句又輕音律又清 〔合席各唱〕	語句又輕音律又清
43	知音者芳心自同 〔送酒唱曲〕	39	知音者芳心自同 〔送酒唱曲〕	知音者芳心自同
42	尊前酒一杯 〔年最長者飲〕	38	尊前酒一杯 〔年最長者飲〕	已過尊前酒一杯
41	小梅香伏侍得勤 〔有婢妾者飲〕	37	小梅香伏侍得勤 〔有婢妾者飲〕	小梅香伏侍得勤
40	祖下了偏衫 〔露体者飲〕	36	祖下了偏衫 〔脱衣者飲〕	祖下了偏衫
39	孔雀春風軟玉屏 〔好陳設者飲〕	35	孔雀春風軟玉屏 〔好陳設者飲〕	兩行是孔雀春風軟玉屏
38	供食太急 〔催飯者一巨觥〕	34	供食太急 〔催飯者巨觥〕	供食太急
37	乍相逢記不真嬌模樣 〔初会者對飲〕	33	乍相逢記不真嬌模樣 〔初会者對飲〕	乍相逢記不真嬌模樣
36	侵入鬢雲邊 〔連鬢鬍者飲〕	32	侵入鬢雲邊 〔連鬢鬍者飲〕	一之一「勝胡蘆」 侵入鬢雲邊

35	繡幃開遙見英雄俺 〔打通閑一次〕	31	繡幃開遙見英雄俺 〔打通閑一次〕	繡幃開遙見英雄俺
34	仔細端詳 〔近視者飲〕	30	仔細端詳 〔近視者飲〕	仔細端詳
33	太平車敢有十余載 〔体胖者飲〕	29	太平車敢有十余載 〔肥大者飲〕	端的太平車敢有十余載
32	春生敝齋 〔貌美者与主人對飲〕	28	春生敝齋 〔貌美者与主人對飲〕	四之一「那咤令」 他若是到來便春生敝齋
31	土氣息泥滋味 〔泥塑〕	27	土氣息泥滋味 〔泥塑〕	四之三「快活三」 也有些土氣息泥滋味
30	恐怕人知 〔懼內者飲〕	26	恐怕人知 〔懼內者飲〕	四之三「小梁州」 恐怕人知
29	既然洩漏怎干休 〔洩氣者飲〕	25	既然洩漏怎干休 〔洩氣吐痰者飲〕	四之二「後」 既然洩漏怎干休
28	早則展放從前眉兒皺 〔前酒免〕	24	早則展放從前眉兒皺 〔前酒免〕	四之二「東原樂」 早則展放從前眉兒皺
27	先生大恩不可忘也 〔張姓飲〕			二之一「夫人云」 先生大恩不可忘也
26	夫人只一家 〔席間同姓〕	23	夫人只一家 〔同姓飲〕	二之二「二煞」 夫人只一家
25	權將這秀才來儘 〔庠士飲〕	22	權將這秀才來儘 〔庠士飲〕	二之一「賺煞尾」 濟不濟權將這秀才來儘
24	誠何以堪 〔再飲〕			二之一「倘秀才」 誠何以堪

71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60
施恩于人反受其辱 〔代飲者一杯〕	帶困寬過瘦腰肢 〔身瘦者飲〕	香煙人氣兩般兒氤氳得不分明 〔喫煙者飲〕	休教淫詞污了龍蛇字 〔說村話者飲〕	好教我左右做人難 〔上下家各一杯〕	我只見頭似雪鬢如霜 〔鬚髮白者飲〕	風過處衣香細生 〔佩香囊者飲〕	要算主人情重 〔任主人飛送〕	哈怎不回過臉兒來 〔面不朝席者飲〕	便提刀仗劍誰勒馬停驂 〔自開拳〕	我定要發落這張紙 〔普席聽合〕	教小生半途喜憂 〔大笑一大杯微笑一小杯〕
	60	59		58	57	56	55	54	53	52	51
	帶困寬過瘦腰肢 〔身瘦者飲〕	香煙人氣兩般兒氤氳得不分明 〔吃煙者飲〕		好教我左右做人難 〔上下家各一杯〕	我只見頭似雪鬢如霜 〔鬚髮白者飲〕	風過處衣香細生 〔佩香囊者飲〕	要算主人情重 〔任主人飛送〕	哈怎不回過臉兒來 〔他顧者飲〕	便提刀仗劍誰勒馬停驂 〔自開拳〕	我定要發落這張紙 〔合席聽令〕	教小生半途喜憂 〔大笑一大杯微笑一小杯〕
施恩於人反受其辱 四之二「紅云」	帶困寬過了瘦腰肢 三之一「油葫蘆」	都至是香煙人氣兩般兒氤氳得不分明 一之三「小桃紅」	休教淫詞污了龍蛇字 三之一「寄生草」	好教我左右做人難 三之二「滿庭芳」	我只見頭似雪鬢如霜 一之二「迎仙客」	風過處衣香細生 一之三「金蕉葉」	要算主人情重 二之四「紫花兒序」	哈怎不回過臉兒來 四之一「上馬嬌」	便提刀仗劍誰勒馬停驂 二之一「耍孩兒煞」	我定教發落這張紙 三之一「賺煞尾」	教小生半途喜憂 四之二「鬼三台」

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
好著我難猜 〔猜枚一次〕	若不覷面顏廝顧盼 〔近視者飲〕	為甚打扮著特來〔虫十晃〕〔マ〕 〔穿新衣者飲〕	好事兒收拾得早 〔畢令合席飲〕	怕動彈 〔面前漬酒者飲〕	指頭兒告了消乏〔マ〕 〔理鬚搔癢者飲〕	文魔秀士 〔在座者飲〕	我是特來參訪儼竟無須推讓 〔敬客一大杯〕	咳嗽一聲 〔咳嗽者飲〕	老夫人拘繫得緊 〔有如夫人者飲〕	盡在不言中 〔裝泥塑一次免飲〕	不是我他人耳聰 〔耳重者飲〕
50		49	後揭 100 番		48		47	46	45	44	43
好著我難猜 〔猜謎一次〕		為甚打扮著特來幌 〔新衣飲〕			指頭兒告了消乏 〔理鬚搔癢者飲〕		我是特來參訪儼竟無須推讓 〔敬客一大杯〕	咳嗽一聲 〔咳者飲〕	老夫人拘繫得緊 〔有妾者飲〕	盡在不言中 〔啞拳〕	不是我他人耳聰 〔重聽者飲〕
好著我難猜 四之一「天下樂」	若不覷面顏廝顧盼 三之二「上小樓」	為甚打扮著特來晃 一之二「快活三」	好事兒收拾得早 一之四「鴛鴦煞」	怕動彈 三之二「朝天子」	指頭兒告了消乏 三之三「折桂令」	文魔秀士 二之二「滿庭芳」	我是特來參訪儼竟無須推讓 一之二「上小樓」	隔窗兒咳嗽一聲 二之二「脫布衫」	老夫人拘繫得緊 二之一「天下樂」	盡在不言中 二之四「聖藥王」	不是我他人耳聰 二之四「麻郎兒」

72	小車兒如何載得起 〔身胖者飲〕	61	小車兒如何載得起 〔肥者飲〕	四之三「収尾」 量這般大小車兒如何載得起
73	顛來倒去不害心煩 〔折過酒者飲〕	62	顛來倒去不害心煩 〔折過酒者飲〕	三之二「普天樂」 顛來倒去不害心煩
74	還準備折桂枝 〔忖試者飲〕	63	還準備折桂枝 〔忖試者飲〕	三之一「寄生草」 還準備折桂枝
75	女孩兒家怎響喉嚨 〔高聲者飲〕	64	女孩兒家怎響喉嚨 〔高聲者飲〕	二之四「拙魯速」 女孩兒家怎響喉嚨
76	這通殷勤的著甚來由 〔多嘴多手者飲〕	65	者 <small>ㄘ</small> 通殷勤的著甚來由 〔伝通者飲〕	四之二「調笑令」 這通殷勤的著甚來由
77	定要手掌兒上奇擎 〔手不擎杯者飲〕	66	定要手掌兒上奇擎 〔手擎杯者飲〕	一之二「哨遍」 我定要手掌兒上奇擎
78	馬兒向西 〔善騎者飲〕	67	馬兒向西 〔善騎者飲〕	四之三「四邊靜」 馬兒向西
79	那裏敘寒溫打話 〔談家常者飲〕			三之三「沈醉東風」 那裏敘寒溫打話
80	冷句兒將人廝侵 〔嘲罵人者飲〕			三之四「鬥鶴鵲」 冷句兒將人廝侵
81	遊糸牽惹桃花片 〔微鬚者飲〕			一之一「寄生草」 遊糸牽惹桃花片
82	倩疎林懶与我挂住斜暉 〔遲到者飲〕			四之三「滾繡球」 倩疎林懶与我挂住斜暉
83	淡白梨花面 〔白面者飲〕	71	淡白梨花面 〔白面者飲〕	一之四「得勝令」 淡白梨花面

84	走霜毫不構思 〔能詩文者飲〕	72	走霜毫不構思 〔能詩文者飲〕	三之一「後庭花」 元來是走霜毫不構思
85	高坐上也凝眸 〔坐首席者飲〕	73	高坐上也凝眺 〔坐首席者飲〕	一之四「喬牌兒」 高座上也凝眺
86	休言語靠後些 〔說話者飲〕	74	休言語靠後些 〔說話者飲〕	四之四「水仙子」 休言語靠後些
87	我願為之並不推辭 〔自飲〕	75	我願為之並不推辭 〔自飲〕	三之一「青哥兒」 我願為之並不推辭
88	口沒遮欄 〔無鬚者飲〕	76	口沒遮欄 〔無鬚者飲〕	三之二「脫布衫」 小孩兒口沒遮欄
89	害殺小生也 〔自飲一巨觥〕			三之一「張生上云」害殺小生也 三之四「張生云」害殺小生也
90	那人一事精百事精 〔多芸者飲〕			二之二「快活三」 這人一事精百事精
91	全不見半点輕狂 〔端坐者飲〕			一之二「脫布衫」 全不見半点輕狂
92	氲的改變了朱顏 〔喫酒面紅者飲〕			三之二「普天樂」 氲的改變了朱顏
93	枕頭兒孤另被窩兒寂靜 〔作客者飲〕	80	枕頭兒孤另被窩兒寂靜 〔作客者飲〕	一之三「拙魯速」 枕頭是孤另被窩是寂靜
94	倆嫌玻璃盞大 〔量小者飲〕	81	倆嫌玻璃盞大 〔量小者飲〕	二之三「月上海棠」 倆嫌玻璃盞大
95	只少個円光便是捏塑的僧伽像 〔光頭者飲〕	82	只少個円光便是捏塑的僧伽像 〔禿者飲〕	一之二「迎仙客」 只少個円光便是捏塑的僧伽像

96	我曾經這船 <small>（こゝ）</small> 磨滅 〔猜拳又輸者飲〕			四之四「攪箏琶」 我曾經這般磨滅
97	跼 <small>（こゝ）</small> 著脚尖兒仔細定睛 〔跼 <small>（こゝ）</small> 立者飲〕			一之三「金蕉葉」 跼着脚尖兒仔細定睛
98	願天下有情的都成了眷屬 〔有親者對飲〕	83	願天下有情的都成了眷屬 〔有親者對飲〕	五之四「清江引」 願天下有情的都成了眷屬
99	定然是神鍼法灸 〔通岐黃者飲〕	84	定然是神鍼法灸 〔通岐黃者飲〕	四之二「禿廝兒」 定然是神針法灸
100	我把五千人作一頓饅頭餛 〔量大者飲〕	85	我把五千人作一頓饅頭餛 〔量大者飲〕	二之一「叨叨令」 我把五千人做一頓饅頭餛
101	爾是年紀小 〔年少者飲〕	86	爾是年紀小 〔年少者飲〕	一之二「五煞」 爾自年紀小
102	雁字排連 〔有兄弟者如數飲〕	87	雁字排連 〔有兄弟者如數飲〕	二之四「紫花兒序」 將我雁字排連
103	春至人間花弄色 〔擲色一次得紅者飲〕	88	春至人間花弄色 〔擲色一次得紅者飲〕	四之一「勝葫蘆」 春至人間花弄色
104	尋思就裏 〔藏色一次〕	89	尋思就裏 〔藏色一次〕	四之三「滿庭芳」 尋思就裏
105	停妻再娶妻 〔前酒未飲再飲一杯〕	90	停妻再娶妻 〔前酒未飲再飲一杯〕	四之三「二煞」 只憂停妻再娶妻
106	玉石俱焚 〔合席飲〕	91	玉石俱焚 〔合席飲〕	二之一「賺煞尾」 也自防玉石俱焚
107	請先生切勿推辭 〔西席飲〕	92	請先生切勿推稱 〔合席飲〕	二之二「耍孩兒」 請先生切勿推稱

108	野草間花滿地愁 〔著靴者飲〕			不明
109	準備著擡 〔乘輿者飲〕	93	準備著擡 〔乘輿者飲〕	四之一「寄生草」 準備著擡
110	誰做鍼兒將線引 〔冰人一杯〕	94	誰做鍼兒將線引 〔冰人一杯〕	二之一「鵲踏枝」 誰做針兒將線引
111	筆尖兒橫掃五千 〔醫士飲〕	95	筆尖兒敢橫掃五千人 〔醫士飲〕	二之一「賺煞尾」 只他這筆尖兒敢橫掃五千人
112	送了人呵斷難又活 〔醫士飲〕			二之三「折桂令」 病染沈痾、他斷難又活。母親偏送了人呵、還使甚嘍囉。
113	欽敬呵當合 〔西席 親家 老者各一杯〕	96	欽敬哈當合 〔西席 親家 老者各一杯〕	二之三「五供養」 欽敬呵當合
114	先生休作謙 〔西席飲〕	97	先生休作謙 〔幕客飲〕	二之二「収尾」 先生休作謙
115	請貴人 〔有職者飲〕	98	請貴人 〔仕者飲〕	二之二「後」 請貴人和鶯鶯匹聘
116	不會諸親 〔主人親戚免飲余各一杯〕	99	不會諸親 〔主人親戚免飲余各一杯〕	二之二「後」 不會諸親
117	唬得人來怕恐 〔巨觥〕			二之四「拙魯速」 唬得人來怕恐
	前掲 56 番	100	好事兒收拾得早 〔畢令合席飲〕	一之四「鴛鴦煞」 好事兒收拾得早

『巾箱小品』は九州大学益田文庫所蔵本を、『酒命叢鈔』は芸雲軒刊本を、『第六才子書』は早稲田大学図書館柳田文庫所蔵『懷永堂絵像第六才子書西廂記』を使用した。